

生死の矛盾をつなぐ生命——三年間を総括して——

沖 永 宜 司

はじめに

本連続パネル企画では、初年度に「出生と生命」と題して、現代の生命操作技術の発達においても、究極的には「与えられ」しかない生命が問われた。そこには、生命操作をする主体自身が「与えられ」たものだ、という自己矛盾があった。二年目は「生きているとはどのようなことか——生命概念の再検討」と題し、モノ的世界の限界点にある生命の姿を確認した。これは生命の両義的存在様式を意味した。また、粒子的、機械論的世界と生命現象との矛盾を、創発の観点から見直した。これらに共通するのは、生命とは、単一の認識形式や価値基準の中では閉じられず、相矛盾する世界観や価値基準の交錯する地点に位置するということである。

一 死の時間はなぜ虚無となるか

今回は「死をめぐる生命」と題し、三回の企画の最後となる。そこでこの小論では、生死の区別と無区別という矛盾を主題としたい。生死を客観的、三人称的な事象として考えると、生は有、死は無であり、すると死後は虚無となる。この視点は、生の先に死があり、しかもその死後の時間は、時間が直線である限り、永久に流れ続けるという構図に則っている。こうなると、死後は何か暗いまま続く実質として得体の知れない恐怖になる。私は無に拘束されたまま、永久に、そして不可逆的に、二度と蘇らない。これは生が有、死が無という鋭い対立の上に成り立ち、その区別も明確である。

しかし他方で、私は気づいたら存在していた。自己の存在に後から気づくとすれば、無から存在に到る境界はわからない。

この場合、誕生以前が何であったかを、生の時間を逆にたどることで理解することはできない。こうなると誕生以前の時間、死の後の時間、そしてそれらの虚無は、生の時間を形作る形式を、誤ってそれらへ適用させることで初めて成立するものとなる。

「……諸々の事物の終わりも、それらの原理も、立ち入り
がたい秘密の下に施しようのなく隠されており、同様に、
人は自分が引き出されてきた虚無も、自分がのみ込まれる
無限も、見ることはできない」⁽¹⁾

誕生前、死後を「見ることはできない」とはいかなる事態か。この問題は、生と誕生前との境界に着目すると明確になる。境界は、そのこちらと向こうとが、同じ概念上の形式に適用されることで初めて観察可能になる。境界が観察不能なのは、その向こう側が、生の時間という形式自体をあてはめられない所だからである。実際、私は生死の境目に気づかずには死ぬだろう。境目がわからなければ、死後は虚無でさえなく、死後はあるかという問いさえ無意味となる。虚無は、生の時間の形式ではかれることを前提に成り立つにすぎないからである。

これは純粹に一人称的な視点から見られた生死であり、それは生をはかる直線の時間に則った、死後が虚無として立ち現れる生死とは相矛盾する。こうした相矛盾する世界が鋭く交錯する現場として、現実の生命は位置づけられる。

二 私と他者との識別、生と死との識別

誕生前と死後に対して、生の時間の形式を当てはめることとは不可能とは、具体的にいかなることか。そこで、原核生物は寿命を持たず、寿命と死とは生物進化の中で、後になってから現れてきた事実に着目したい。

「最初の単細胞のモネラは、分裂とよばれる単純な過程において、無性的に増殖していた。この増殖の様式では、与えられた細胞は自分のDNAを自律的に複製し、二つの完全に同等なその細胞自身のクローンへと分れる(中略)。このようにして、単体の細胞である生物は、決して本当に死ぬことはない。結局、どこに遺体があるろう？ 死体不在において死があり得るのだろうか？」⁽²⁾

「死体不在」なのだから、「死ぬことはない」という言い方は、一見説得力がある。しかしそこで、分裂前の個体は、分裂後どこに行ったのか。分裂後の個体のどちらか一方が、分裂前の個体と同一であることはない。識別不能な複数個体の一方だけが、分裂前と同一ということはないからである。では分裂後の二つの個体とも、分裂前の個体と同一なのか。それもなし。二つの個体が一つの個体であるというのは、個体の本質に反するからである。つまり、この単性生殖においては、識別された単一の個体という前提がそもそも成り立っていないのである。

ここで「死」が、個性を条件としていることがわかる。個

体性という条件がないとき、「死」は成立しないと同時に、「不死」ということも意味がなくなる。個性性という前提はその個体の死を予想させるが、個性性がなければ、その個体の死、そして死後は何かという問いも無意味になるからである。

そして、「私」を「あなた」から区別する形式と同じ何かによって、生死の境界も生じ、死後の虚無も生じた。だが他方で、この区別を単なる虚構として済ますこともできない。我々が生きる現実の世界は、個体的識別を前提に、たとえば社会的、法的制度が成り立ち、我々の生存の条件になっているからである。それでも、究極の所でこの識別はない。その矛盾した状態の「つなぎ」の位置に、現実の生命が働いている。

結局、生死の境界と、死後についての問いは、「私」が他者から識別されるための論理を前提とするが、その識別の論理がもたらす存在論は、非常に極端な宇宙像を作り得るのである。たとえば「私」の死は、その後も存在し続ける宇宙の側から見れば、極めて小さな出来事にすぎない。しかしこの死は、「私」の側から見れば、それをもって宇宙が終わるとも言い得る。両者は極めて大きな矛盾を含む。

だが、「私」と他者との区別が究極的に不成立ならば、このような「私」の独我論的な特権化も生じず、その独我論から帰結する極端な事態も生じない。同様に、死後に永遠の虚無に耐えなくてはならない極めて小さな「私」という考えも、「私」が孤立した個体ではない場合には不成立となる。私は、その死

が宇宙の終わりでもあるような特権的存在ではなく、反対に、死後に宇宙の永久の時間継続に対して虚無を強いられる運命を背負った極微の存在なのでもない。両者の見解とも、他の何者でもない「私」の存在という、他者からの識別を前提とした直線の時間において形成された点では共通している。

三 死のない時間の様態

個体が特定化されると、その個体がどこから来たか、そしてどこへ行くのかが問題となり、そこに個体の始めと終わりが問われ得るようになる。反対に、個体をその個体たらしめる論理が成立しないとき、その個性性は問われなくなると同時に、その個体がどこから来たかも問えなくなる。「どこから」、「どこへ」は、あくまで個体たらしめる論理の枠内で提起される問いだからである。

二つに分離された脳半球の一方を「私」Aと名づけた上で、翻ってかつて二つの脳半球が接合されていた時間において、その「私」Aは誰であったかを問うことはできない。その「私」Aとは、脳の半球のみが独立した個体として識別された論理の中で初めて成立した何かであり、その個性性が未成立の状態について、その個体の論理を用いることはできないからである。つまり半球としての「私」Aの時間と、今や別の個体である「私」Bとが接合して成り立っていた脳全体としての「私」Cの時間とは別物なのである。「私」Aの時間は、「私」Aの個体

の論理誕生の地点で始まる。⁽³⁾そして、「私」Aを成り立たせる直線の時間形式は、「私」Aの論理の誕生以前には入り込めないのである。

このように、我々の世界は、直線の時間だけで成り立っているのではなく、むしろ直線性の時間をも構成する時間を、根源的に所持している。それは「私」の存在の因果的な原因が究明される時間でもない。何かの原因は、一定の形式の中で何かと何かが区別されることを条件とする。ならば、もし私と宇宙が「未分化」なら、「私」個人の存在理由に窮することは最初から無意味である。

この、誕生以前や存在理由を無意味化する時間が、直線の時間に対して円環的時間⁽⁴⁾と呼ばれることがある。しかしここではあえて、「球面的」という喩えを用いたい。円環では、すべての点が単線上で相対的な位置関係を持つため、時間的前後は明確である。また、始めと終わりがつながり、時間が同じ仕方で回帰する。しかし球面にはその単線性はなく、ある点と他の点との位置的関係は無数にあり得、前後が一定の順序関係の中で位置づけられない。したがってある意味、「時」は流れない。始まりも終わりもないことでは円環と同じだが、同じ仕方の回帰はない。その球面上で、「私」は特定の地点には居らず、またあらゆるところに居る。

直線の時間はこの球面から、識別され分化された世界として生じる。我々は球面から生まれながら、直線的な形式の中に自

らを閉じこめる。直線は理性、球面は生とも言い換えてもよい。生から生じた理性が、生を抽象化し、死や虚無の時間をも作り出しているのが直線的时间である。球との接点を通り、球面から遠ざかりつつ延びてゆく直線は、果てのない暗い空間に、終わりなく続いて行く。しかし、原初の生に戻ったとき、直線の行き先である死や虚無は、もともとと虚構された行き先であることがわかる。ここに、生死の同一と対立という矛盾が示される。

四 生死の対立と生死一如をつなぐ生命

球面的時間にある実在は、特定の個体という限定を受けない。⁽⁵⁾むしろ個体を特定化すると、球面的時間から離反することになる。しかしここでは反対に、「私」の個体化を徹底させ、もはや個性が意味を失う地点で開ける、「私」の消滅に着目したい。そこに生死一如と無我が再確認され、またそれがいかに現実の自我と不離な関係にあるかが明らかにされる。

球面の比喩でも示された、この生と死との境界のない全体の一例として、道元の「全機」が考えられる。「全機」とは真理の全現成を意味する。したがって全体の部分が真理であることではない。また全体である限り、全体の外側がない。

「諸仏の大道、その究尽するところ、透脱なり、現成なり。その透脱というは、あるいは生も生を透脱し、死も死を透脱するなり。」⁽⁶⁾

「透脱」が実現されなければ部分の作用となり、その場合の

生と死とは、対立的な関係のままになる。同じ時間直線上に二者が対置されるのはこの状態である。生と死それぞれは、同じ時間直線の中の部分である。しかし「透脱」後は、生と死とを対置させるこの形式自体が無効になる。

生と死とは、「一」にあらざれども異にあらざらず、異にあらざれども即にあらず、即にあらざれども多にあらず。」

AとBとが「一」または「異」、「即」または「多」の関係になる場合、それらの関係を両者の間に成り立たせる形式が必要になる。しかし「全機」における生と死は、関係を絶しているので「異」となることさえできない。このとき、生も死も全体であって、それらの外部というものがない。そして生から死への時間的経緯が成り立たない。それを『信心銘』は次のように表現する。

「一如の体玄、兀爾(ごつじ)として縁を忘す。」

「縁を忘」じ、果てがない。したがって、どこから来て、どこへ行くかが問題にならない。

実際、単性生殖にとつての死は、生と「異」なるのではなく、生との対立が意味をなさないため、端的に存在不可能である。これは、「死」と対立した「生」が未だ成立していない未生である。そこで、「生」と「死」とは「一」も「異」もない。それらを包括して「生」と呼ぶならば、「生」は境界のない全体である。この全体から、死を規定する枠組みが後になって分化した。他方、道元には、死が生じた、という言明はない。しか

し本当に生は生、死は死であるなら、それらは一切の並置や比較の条件を欠いている。生と死とは「異」なるのでさえなく、「異」なることの根拠がないのである。そのとき、生死の対立がなくなることと、自他の境界がなくなることが同時に生起する。

しかし球面の時間では、球の中心から等距離にある無数の位置が、各々異なった球面上にある。つまり同じ仕方の一つの球全体の構成を担いながら、球面上ではあくまで異なっている。この二重性は、「全機」の時間と、生死が区別される時間との関係に置き換えることができる。「全機」では、生も死も、究極的には同じ一つの球だが、球面上では、生と死とは別々の時間的位置に配置される。我々は「全機」のみで生きることはできず、「全機」であるのと同じくして、生死が区別された時間の中にもある。したがって、二つの時間は異なりながら重なっている。

このように、区別を形成する直線的時間と、「全機」のような球面的時間とは、完全に別物でも同一でもなく、異なりながら重なっている。この二重性は、境界のない時間に最終的な根源性があるとしても、その時間にも、反対に直線的時間にも、一方的に還元される関係ではない。

おわりに

三年間にわたり議論してきた「思想としての生命」であるが、

三年間で扱ったトピックは、私たちが語る生命の姿が、どれも生命全体の一面にすぎないこと、そしてそれらの側面は相矛盾する性質を呈することを示していた。生命操作を主導する「理想」は、自分自身与えられた生命であるという自らの足場との矛盾を隠蔽することはできない。

生物が生きているという状態は、物質から形成されながら、物質に見出せない性質を含んでいる。一人称、目的性、自己組織化、その他諸々の性質がそこに含まれる。かと言って、そこに非物質的な靈魂が働いているかと問われれば、それも見出せない。その意味で、生命は物質でありながら物質ではなく、精神的でありながら物質とは別にそれが見出されるのではない。

死後を虚無として捉える時間形式は、死が存在しない時間形式から抽象されて出てきた。つまり前者の虚無は後発にすぎないが、しかし論理としては逆らい難い堅固さを伴っている。この二つの時間形式は、死に関する矛盾として現れたが、その矛盾は現実の生命の存在状態に関する矛盾ともオーバラップしている。

生命とは生物学的に見れば物質と言えるかもしれない。しかし存在に関するさまざまな領域を全体として見渡すと、生命と一つの世界と、そことまったく相反する別の世界とをつなぐ媒介をなしている。

(一) Pascal, *Pensées*, Paris: Garnier Frères, 1964, Article II 72, p.88. 『⁶

ンセ』塩川徹也訳、岩波文庫、二〇一五年、断章一九九、二四四頁。
(2) Clark, William R. *Sex and the Origin of Death*, Oxford U. P., 1996, p.62. 『死はなぜ進化したか』岡田益吉訳、三田出版会、一九九七年、八〇頁。

(3) しかもそれは、「私」の生物学的誕生の地点ではない。「私」という個体は、「私」が生物として誕生した瞬間を知らず、その瞬間では個体の論理は未成立だからである。

(4) 直線の時間に対する円環的時間は、輪廻的な回帰的時間として考えられることが多い。しかしそれは最初と最後とがつながるだけで、方向性としては不可逆である。そして回帰する限り、新たなものを生み出さない。しかしここで球面的時間は、不可逆的方向性や、新たなものの出現について、自らを限定していない。つまり、そのような限定以前の時間状態に相当する。

(5) 限定を受けないものを、限定された概念によって理解することは背理になる。本論での球面的時間の理解困難はそこにある。たとえば、私であってあなたである、という限定以前の状態は、自他の区別を前提とする概念によっては理解できない。それらの包摂概念がないからである。限定を受けないもの、たとえば西田の「真の無の場所」はそうした状態のはずだが、「場所」などの言葉で語られると、直ちに限定された性質になってしまう。それに対して後期西田の「絶対矛盾的」という性質への展開は、限定された把握の拒絶という方向には踏み込んでいる。

(6) 道元『正法眼藏(二)』水野弥穂子校注、岩波書店、一九九〇年、八二頁。

(7) 同書、八五頁。

(8) 三祖僧璨『信心銘』、梶谷宗忍・柳田聖山・辻村公一『禪の語録16 信心銘・証道歌・十牛図・坐禅儀』筑摩書房、一九七四年、二二頁。

(おきなが・たかし、哲学・宗教学、帝京大学教授)